



若者は、時代を先取りする鋭い感性を持っています。とりわけ学生は、上からのお仕着せではなく、自分で考え立ち上がり「危機」と感じた時には、時には「過激」とも言える行動を起こしました。

東京商大生籠城事件

1931年10月6日夕刻、東京・神田神保町の交差点で東京商大（のちの一橋大学）の学生デモ隊と警官隊がもみ合いになり、大乱闘事件が起こりました。この日検束された学生は114人。学生たちはその日のうちに釈放されました。この事件の背景には、政府の放漫財政が積もって超大型赤字になったことに加え、金融恐慌、世界恐慌の影響で都市や農村で農民や労働者が低賃金と失業で困窮していたことがあります。政府は緊縮財政でこれを取り切ろうとしました。文部省は東京商科大学予科、専門部廃止の案をまとめようとしていました。学生たちは事の

重大性に気づき、神田一ツ橋の旧校舎に1600人の全学生が籠城して、若槻礼次郎首相や、井上準之助蔵相などに陳情に行きましたが、なかなか進展を見ません。学生たちはやむにやまれずデモを実行、警官隊との衝突が起こりました。この暴力事件に世論は味方し、結果、文部省の案は撤回されることになりました。

ファシズムへの抵抗

1933年4月、京都帝国大学法学部で高文試験委員でもあった瀧川幸辰教授が「赤化教授」とみなされ、文部省は小西京大総長に瀧川の罷免を要求、京大法学部教授会および小西総長はこれを拒絶しましたが、処分は強行されました。京大法学部は教授31名から副手に至る全教官が辞表を提出して抗議の意思を示しました。京大法学部の学生は教授会を支持し、全員が退学届を提出し、他学部の学生もこれに続きました。しかし、官憲の弾圧

もあって、学内の抗議運動は終息していきません。ファシズムが学問の自由を侵す勢いはとまらず、学生にも及びました。1940年9月、当時東大の学生であった隅谷三喜男の下宿に、刑事がやってきて、寝込みを襲われ検挙されました。隅谷は取り調べに黙秘の態度で抵抗したため、12月10日に釈放されるまで、六本木警察署の独房に入れられました。隅谷は戦後東大に戻って労働経済の研究者として多くの業績を残しました。

60年安保闘争と全学連

1951年9月8日、サンフランシスコで、対日平和条約と同時に日米安保条約（旧安保）が締結されました。旧安保条約は、米軍に日本での駐留を全面的に認めましたが、日本防衛を義務づけたものではありませんでした。岸信介首相は、日本を防衛する責務を米軍に求める

こととし、新安保条約を結ぼうとしました。これに対し、革新陣営は戦争放棄を謳った憲法に違反するものとして危機感を抱き、学生や多くの若者を巻き込んだ「60年安保闘争」が繰り広げられました。

60年安保反対運動を指揮したのは「安保条約改定阻止国民会議」で、総評や社会党、共産党によって構成されています。しかし、デモで大きな力を発揮したのは、全学連（共産主義者同盟）でした。ブントは一方で打倒・岸（信介）を掲げ、他方で打倒・宮本（顕治・日本共産党委員長）を掲げていました。これを指揮したのは全学連委員長の唐牛健太郎でした。60年4月26日、唐牛は国会前の装甲車によじ登り、これに続いた学生たちも装甲車を乗り越えました。このデモで唐牛らが逮捕されました。既存の左翼陣営からは全学連は過激派と見られましたが、一般の学生は全学連の呼びかけに応じて次々とデモに参加していききました。5月19日、与党が安保条約改定を強行採決したことから、デモが激しくなりました。6月15日夕刻、全学連のデモ隊が国会正門前に突入。これを阻止しようとして機動隊員が警棒で殴り掛かりました。学生は投石で抵抗しました。この混乱の中で、東大生の樺美智子さんが圧死しました。6月18日、新安保条約は自然承認されました。この日、国会周辺は33万人（主

催者発表）のデモ隊や群衆で埋め尽くされました。そこから潮を引くように安保反対運動は沈静化していききました。ブントからは青木昌彦、西部邁、柄谷行人など、その後、各界で活躍する人たちが出ました。唐牛は47歳で世を去りました。

東大紛争と全共闘

1968年1月に東大医学部自治会が無期限ストに突入しました。6月15日には東大全共闘が安田講堂を実力で占拠、紛争は全学に広がり、全共闘は次々とバリケード封鎖を決行しました。11月1日、大河内一男総長は辞任、加藤一郎教授が総長代行に選ばれました。各学部自治会では、大学当局との確認書を批准し、バリケード撤去を始めましたが、全共闘は安田講堂占拠を続けました。大学当局は機動隊の導入を決断し、69年1月18日早朝から大量の放水と催涙ガス弾を発射、「安田講堂攻防戦」が繰り広げられました。東大全共闘防衛隊長としてこれを指揮したのが今井澄でした。今井は、その後、医師として長野県の地域医療に従事し、長寿王国長野の礎を築きました。1992年からは社会党（のちに民主党）の参議院議員として医療問題で活躍しました。今井は2002年9月、胃ガンで

命を落としますが、その年の4月に発刊

した著書「理想の医療を語れますかー患者のための制度改革を」は、今井の遺志を伝えたものとして多くの人々に共感を与えました。

安保法制とSEALDs (Students Emergency Action for Liberal Democracy-s)

2015年5月、安倍晋三首相は、それまで違憲と解釈されてきた、集団的自衛権の行使を可能とする安保法制を国会に提出しました。これに抗議する学生たちが首相官邸の前に集まりました。SEALDs（シールズ）の学生たちです。彼らは、ファッショナブルな衣装に身を包み、ラップ調で政府に反対のシユプレヒコールを叫びました。60年代、70年代の学生運動とは違うスタイルの抗議行動に多くの人々が注目しました。次の時代、学生たちはどんなスタイルで抗議活動をするのでしょうか。

最後に若者への私のメッセージです。ミヤンマーの軍事クーデターへの市民の抵抗が報じられています。多数が被害されたとの報道もあります。命がけで自由を守ろうとする市民たちへの「連帯」の気持ちをお忘れではありません。これは決して他人ごとではないのですから。次世代を担う若者への期待を込めて。

行不由徑（ゆくにこみちによらず）とは、論語にある言葉で、「裏道や小道などを通らず、常に正道を行く」という意味。本コラムでは、これまでの連合運動を振り返りながら次の時代を考え、連合が歩むべき正道とは何かを逢見会長代行が語ります。